

Audio-Lingual Method (オーラル・アプローチ) は役に立つ指導法か？

—その指導法の考え方と指導の実際から—

中谷 瑤子

1. はじめに

現在の日本社会ではグローバル化が進み海外からの旅行者が増え続けている。それに加え、ビジネスの社会でも事業の海外進出や提携、外国人労働者数の増加で、日本人が外国語（主に英語）を習得し、母語以外の言語を使用し海外の人とコミュニケーションを図ることが求められる世の中へと変化してきた。当然のごとく、その国際化の波は教育現場にも押し寄せ、学校での英語教育の改善や教員の質の向上がうたわれている。今の日本の学生に求められている能力は、外国語を話す力（コミュニケーション力）である。実際、求められる外国語能力として文部科学省は「グローバル社会で求められる外国語能力とは、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ることが出来る能力と言える。」（初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室, 2011）と記述している。さらに、「文部科学省は13日、中学の英語の授業は原則、英語で行うことなどを盛り込んだ「英語教育改革実施計画」を発表した。より実践的な英語指導への転換がねらい。学習指導要領の改訂などを経て、2018年度から段階的实施を目指す。」という報道もなされている（朝日新聞、2013）。従来の日本の英語教育は文法訳読式であり、受験に有効的な「書く」「読む」という力は伸ばすことができた。

しかし、実践的な「話す」「聴く」という能力を伸ばすには向いていなかった。その点、このオーディオリンガルメソッド（AL法又はオーラル・アプローチ）は、口頭での英文フレーズの反復練習から記憶に定着させ自然と英語を話せるようにするものであり、日本人が苦手とする外国語でのコミュニケーション力（会話）を伸ばすことが可能な教授法であるかを考えていきたい。

2. オーディオリンガルメソッドの歴史的背景・基本理念

第二次世界大戦勃発時、外国語を話せるいわば通訳者が必要であったが、それまでの教育法（reading method）では、話し言葉の上達には向いていない方法であった。そして、言語指導で用いられる教授法の1つであるオーディオ・リンガルメソッドを考案したのは、ミシガン大学のチャールズ・フリーズ（Charles Fries）、アメリカ言語学会の創設に関わったレナード・ブルームフィールド（Leonard Bloomfield）らである。

日本においては、オーラルアプローチ（Oral Approach）とも呼ばれている。彼らが主張したこの教授法では、初期段階の学習指導は口頭練習で行うというものである。また Fries は「Oral は指導法の目標を示し、生徒らが自動的に英語を口頭で発表できるようになることである。また、approach とはその目標に達成するのに必要なあらゆるものを含む道筋である。」（英語教授法展望, p.168）と述べている。そしてこの用法の狙いとしては、生徒らに多くの練習の機会を与えるにはどのようにすれば可能なかということである。

この用法で扱われる文法は、英語を母語とした人々の会話を記述したものである。英語の上達には話すという口頭練習が必要だと考えられる。なぜなら、「ことばを使うとは口頭言語による行動（verbal behavior）であると考え、言語は習慣が集まったものである。つまり、『言葉を身につける』ということは言語の習慣を形成することだと考えられ、繰り返し pattern の練習を行うことが課せられる。」（田崎清忠, p.61）。とあるように言語を習得するには、「話す」という行為からの影響が高いと言える。

3. オーディオリンガルメソッドの役割と効果

この技法の役割としては生徒に英文（フレーズ）を何度も繰り返し発話するなどの反復練習によって対象のフレーズを習慣化させ、記憶に定着させ、正しい言語の発話ができるという理論に基づいている。この用法では様々なアクティビティを行うため、生徒たちは英語により関心を持ち学ぶことができる。日本人の英語学習者の多くはインプットの量は多くアウトプットの力が極端に少ないというのが特徴である。

この指導法としては、教室内での母語の使用は禁止されすべて英語で行われる。なぜなら、生徒らの母語と英語は異なる文語形態であるため、英語を学ぶ際には日本語と英語とは分離させるべきだと考える指導である。教師が生徒に出す指示もすべて英語になるので教師に対する負担は大きい、この英語を必ず使わなければならないという環境に生徒らが置かれることにより必然と自ら英語で何かを表現するという力が備わり、また、英語を聞くということから耳慣れにもなる。

しかし、母語を使えない環境に不安を持つ生徒もいれば、息苦しさを感じ、英語が難しいものだと壁を作ってしまう恐れもある。それを回避するために、活動や写真、絵など非言語的なものを交えながら指導していくことにより生徒の精神的負担を減らせるような工夫が必要となる。また、「オーディオリンガルメソッドによる教材開発論が外国語教育に大きな貢献をした。」(田崎清忠、p.66)と述べられている。なぜなら、授業で新出事項(構文・文法)の導入時の指導をする際に、既出事項と新出事項とを対比させることが出来るため、学習者である生徒らには理解しやすいものと言える。実際に、中学の検定教科書である7社のうちほとんどがこの用法を扱いやすい文法や構文を取り入れたものが編みこまれている。

4. オーディオリンガルメソッドの課題

しかしながら、この教授法だけを用いて英語の力を伸ばすには無理がある。なぜなら、この用法ではフレーズを口頭で繰り返し練習し脳に記憶させ自動的に英文を話せるようにする用法であるため、英文がパターン化されコミュニケーションを図る際に対応性に欠け状況に応じて対応することや自分で考えたことを発言することが難しい状況を生み出すと考えられる。

教育現場で実際にこの用法を使用した結果様々な問題点が発見された。「反復練習だけでなく、言葉の規則も理解させようとして自己表現など、創造的な言語使用をさせたほうが外国語学習の成功に導きやすいという考えや、そもそも言語の本質をとらえていないため、意味よりも構造の理解と操作に指導の中心点がおかれている。また、語彙の意味を教える有効な技術を持ち合わせていないため、新出単語の指導ができない。アクティビティーとしては、Pattern practiceは必要ではあるが、教室内での中心的な活動としては不十分である。そして、言葉として意味が通じるか、ということよりも言語の形式が正確に発せられたか、ということに焦点がおかれる指導法のため機械的で実践的ではないのではないか。」(田崎清忠、p.66)という批判がある。

しかし、これらの問題点は、日本の教育現場で正しく用いられなかったということもある。本来は前もっての説明をせずに指導していくものを先にしてしまったというような間違った指導法によるものもあるため、一概にすべての問題点がこのオーディオリンガルメソッドの指導法のせいであるとは言い切れない。また、このオーディオ・リンガルメソッド目的は英語(外国語)を会話的に使えるようにすることとしている。そのため、今までの指導法のように個人で与えられた教材から英語を学ぶ指導では限界が生じている。そして、生徒の母語と英語とを離す指導法であるため授業内では一切母語を使用してはならず、教師には大きな負担となる。そして、生徒らも母語以外の言語での授業には、抵抗もあり、英語での授業をずっと続けるのには無理がある。そのために、非言語(写真、絵、など)を使用し指導するがすべての授業で使えるわけではないという問題点があげられる。

5. アクティビティーの効果

オーディオリンガルメソッドのアクティビティーとしてよく用いられているのがPattern practice(文型練習)である。Pattern practiceという用法は生徒らがどの位置にどのような単語を当てはめ、どのような構文を用いるのかを意識せずに自動的に口頭で発することのできる状態に導くことを目標としているものである。この目標を達成するためには、同じ文型の文章を用意し、それを何度も繰り返し発音し身体に浸み込ませ瞬時に自動的に発する練習(drill)を行う必要がある。

例としては、

Sam: Lou's going to go to college next fall.
Betty: Where is he going to go?
Sam: He's going to go to Stanford.
Betty: What is he going to study?
Sam: Biology. He's going to be a doctor. (Anderson, 1986)

上記の文章で共通している部分として“going to ~”が見て取れる。これらのフレーズを素早く復唱していき自動的に言えるようにすれば英語が話せるという自信を生徒に持たせることが出来、英語を学びたいという意欲を持たせる動機付けにもなる。このアクティビティーで気を付けなければならないのは、pattern practiceは常に会話文でなければならないということだ。会話文を使用することにより、実際に日常で使用できる英文を口頭での反復練習を通して習得するため、実際に使える英語を習得する。

その他のアクティビティーとしては、dialogue memorization、backward build-up drill、single-slot、multiple-slot、chain drillなどがあり、どの用法も口頭での反復練習が主となっている。

dialogue memorizationは、生徒は模倣(生徒がAを担当、教員がBを担当)を通して対話を暗記し、生徒はAのセリフを

学んだあと、役割を交代し、Bのパートを覚える。そして、クラスの半分の生徒がAを担当、残り半分がBを担当し、発音する。対話を暗記したあと、クラス内でABのペアになって練習するという指導法である。

backward build-up drillは、教員がよく間違え長めの対話をいくつかのパートに分け、パート訳された文の最後の部分を繰り返し練習させパートを一つずつ増やし、生徒らが全文を言えるようになるまで繰り返し練習させる。文の後ろから言っていくことで忘れやすい文末を記憶に定着させることができるというものである。

single-slot、multiple-slotは、文の穴あき部分を見つけ、埋める練習をすることを主な目的とする。例えば、教師がある対話文から一文を取り出し口頭で生徒に聴かせる。そして、単語やフレーズのヒントを生徒らに与え、生徒らはそのヒントを正しい場所に入れて文を完成させ、それを読むという文章の中のどの場所にどの品詞が入るかを学ぶものである。

そして、chain drillは、質問と答えとを一人ずつ順番に回していく練習法である。教員がある一人の生徒に挨拶をし、挨拶を交わした生徒は違う生徒に質問をし、回していくことでコミュニケーションが取れるというものである。このように、このオーディオリンガルメソッドでは、文型や文法は対話の中に含まれているためそれを通して学んでいく。そして、対話のセリフに基づくドリルの中で後に練習される。

このようにこれらの活動は、生徒たちの「英語を話す」という姿勢を必然的に引き出すことができる。実践的に使える英語と言うのはコミュニケーション（会話）能力である。つまり、「話す」「聴く」という技術の指導が必要である。また、どの用法でも英文（フレーズ）を口頭で繰り返し何度も練習するため、「話す」という姿勢が自然と身に付けることができる。

6. まとめ

現代の日本社会ではありとあらゆる場所や場面で外国語が使用されている。これからの社会を生き抜く術として必要不可欠なものと言っても過言ではない世の中である。しかし、未だ英語を話せない、難しい、読み書きはできるが会話をするできないといった日本人が多い。なぜなら、学生の中に学ぶ英語と言うものは入試向けであり、どうしても効率性を優先した授業がほとんどだからである。しかし、このまま従来の英語教育法（主に文法訳読式）での指導を続けていても効率性は見受けられるが、ただ与えられた教材を読み、解いて、という授業では実践的な英語を話すという能力は伸ばされない。

今回、「オーディオリンガルメソッドは本当に役に立つ指導法なのか？」について様々な情報から調べた結果、授業のすべてをこのオーディオリンガルメソッドで行うには無理があり、また、多くの問題点が見受けられることが分かった。それを踏まえて、実際の授業で扱うならば導入部分でのアクティビティーとして、生徒の英語を学ぶ姿勢、態度を作り出すものとしての指導、または、展開の部分での反復練習で扱い、口頭での練習になるため、生徒たちの関心が英語を話すことに向けられるので、そういった方法として扱うには大いに役立つ指導法だといえる。

参考文献

中学の英語授業、英語で18年度から、教員能力も検証、retrieved 24/07/2014 from<http://www.asahi.com/articles/TKY201312130048.html>

田崎清忠 (Ed.) (1995)「現代英語教授法総覧」東京：大修館

Diane & Anderson (Ed.) “*Techniques & Principles in Language Teaching*” New York: OXFORD Press

■英語科教育法Ⅱ 春学期レポート課題

指導案と授業の進め方・学習指導案の書き方

戸田浩美

1. はじめに

授業をするにあたって一番大切なことは何かと考えてみる。「生徒たちが目を輝かせ、大きな声で発音し、生き生きと伝達発表活動に参加する。そのような授業を展開したい。」(樋口, 2007)ほとんどの教師はこのように考えるのではないかと思う。子どもが楽しく、わくわくするような授業を作り上げたいということではないか。また教師の仕事は生徒の中にある『質的寛容』引き起こしたか否かが授業成立における要件であると樋口 (2007) は言う。質的寛容とは授業の中であるいは外で、今まで言うことが

できなかった表現が言えるようになったというような「技能」の変容や、言語や題材内容などについて知らなかったことを知ったという「知識」の変容がある。そして一番重要な変容は生徒たちの日常生活の物の見方や感じ方、人との接し方が変わったというような「態度」の変容である。生徒が積極的に授業に参加する。常に授業風景が明るく楽しい。そして生徒の変容を引き出すことができる授業をすることができれば、教師の理想の授業ができたといえるであろう。

2. 学習指導案を書く理由

学習指導案を書く理由は二つある。一つは教育が目標を持って生徒の変容を意図する営みであるから。(三浦,2009)つまり教師の求める子供の変容を引き出す理想の授業という目標に向かって、どのように授業を展開していくかを明確にしていく。どのような場面で子供の変容を引き出していかというビジョンを具体的に示すために書くのである。もう一つの理由は教師の準備が不足していると子供のやる気が削がれ、教師に対して失望してしまうということである。(三浦,2009)子供は教師に対して期待を持ち授業の準備をして学校にくる。それに対して教師が準備を怠り、授業の内容や準備物を忘れ授業がめちゃくちゃになってしまう。すると生徒はその教師に失望し、授業に参加しなくなると考えられる。子供の可能性や変容や可能性を引出し、授業を効率よく円滑に進めるためには学習指導案を書くことは必要不可欠であるといえる。

3. 指導案の書き方とその留意点

指導案は大きく単元(題材)に関する記述と本事案(その日一時間の授業計画)とに分けられる。(三浦2009)本事案については、次項の「4.うまく授業を進めるには」で述べようと思う。三浦(2009)によると単元とは教科書で“lesson”や“unit”などの名称で呼ばれている区分であり、まとまりのある話の内容で構成されている。書くものとしては①タイトル(「英語科学習指導案」など)②年月日などの日時、指導者名、学年クラスなど③単元名(または題材名)④単元設定の理由(または題材設定の理由)⑤単元の「指導目標」(学習指導目標)⑥単元の「指導計画」の6点があげられる。この中でも重要と考えられるのが、④と⑤であると考えられる。

④の「単元設定の理由」には、3点の事柄を書く。一つ目は、このLessonではどのような内容の題材や言語教材・言語機能を扱っているのかである。たとえば、地球温暖化やアメリカなどの外国文化の理解などの題材を書く。未来表現を扱うなどの文法事項や英語表現の使い方を示していく。二つ目はこのクラスの実態はどうであるかである。英語の授業についていけない生徒が多いのか、物静かな生徒が多くて、クラスの雰囲気落ち着いているというような生徒やクラスの特徴を示していく。三つ目は一つ目と二つ目に基づいてどのような方針で指導していくかである。“扱うテーマが難しいから時間をかけよう“や”ペアワークで授業を進めていこう“というような教材の困難度の予測、学習形態などを示す。この「単元設定の理由」を書くことによって教材の扱い方、生徒の様子を知り、授業の進め方の基盤ができると考えられる。

⑤の単元の「指導目標」には4つの観点と英語に必要な4技能(聞くこと、書くこと、話すこと、読むこと)が結び付けられなければならない。4つの観点とは「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「表現の能力」、「理解の能力」、「言語・文化の知識・理解」である。(三浦,2009)1つのLessonでどういうことを生徒に身につけてもらいたいかを書いていく。・自分の得た情報を編集(書くこと)して、相手に伝えること(話すこと)ができる。(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)・It ~ for...to, 疑問詞+不定詞, 関係代名詞の入った文を理解すること(読むこと)ができる。(理解の能力)・It ~ for...to, 疑問詞+不定詞, 関係代名詞を使って言いたいことが伝えること(話すこと)ができる。(表現の能力)(樋口,2007)例としてこのようなものがあげられる。この目標を書くことによって生徒に学んでほしいことと身につけてほしい能力とを結びつけることができる。もしも、この目標がないと生徒が何をどのように達成するのかがわからなくなってしまうので、この部分はしっかりと考える必要があると思う。

4. うまく授業を進めるには

教師は一時間という制限された時間の中で授業をスムーズに進めるためには何を教えなければならないのか、どのように教えていかを考えなければならない。これを記しているのが本事案である。高橋(2003)によると授業は、「山登り」にたとえることができ、本時の目標(=登るべき山)が決まれば、どのような経路を通して、生徒を一人の脱落者、落伍者もなく目標地点する頂上まで到達させるかを検討する。このようなイメージを持って授業の展開を考えて、本事案を書いていくのが望ましい。本事案には授業の流れの記述・時間配分、指導方法の記述、評価の視点・指導上の留意点を記す。その授業の流れとしては導入→インプット→本文(意味の推測、規則の発見)→確認と定着→アウトプット(学習活動)→言語活動というものになる。

本事案を書くにあたって授業の導入の仕方には工夫がいるだろう。“教室に入った途端に、「では〇〇ページを開けて、大きな声で、英語らしく教科書を音読しよう。はい、A君、立って読んでみなさい」などと言っても、多くの生徒は心も身体も、そし

て発声器官も未だ準備できておらず、満足な音読ができなくてとうぜんです。”(高橋,2003,pp.29 - 30) このように導入の段階から生徒にとって負担のかかるような要求をすると生徒の授業に対する関心を損ねてしまいかねない。また高橋(2003)によると生徒がこれから楽しく、頑張って英語の学習を始めようという心と身体の構えと学習の雰囲気を作ってあげる必要があるという。歌を通して英語のリズムや既習の表現になれさせることを目的として、あいさつの後に、毎時間英語の歌を歌う。(樋口,2007) そのほかにも早口言葉や生徒主体のクイズなど先生が教えるものから生徒が作り上げていくものまでさまざまなものが考えられる。この導入には発声練習を中心に据えるのが効果的と高橋(2004)は言う。英語の発音やリズムの習得、語彙力の増強、リスニング能力の伸長、コミュニケーションへの積極的態度や能力の育成にもつながる。この活動に既習のものを使うとより英語学習に効果があるのではないかと思う。前回習ったものを取り入れることで生徒は復習し、定着させることができるだろう。

新しい文型文法事項、新出単語の導入がインプットにつながる。これまでに習った事柄と対比して行う、生徒の興味のある事柄(芸能、スポーツ)に関連させて行うとより生徒の知っていることに触れているのでより効率よく定着させることができるといえる。たとえば過去形を習うときに現在形と絡めて教える。芸能人やスポーツ選手の名前を出して例文をつくというような感じである。新出単語についてはフラッシュカードを有効に使うことで授業をテンポよく進めていくことができる。(三浦,2009) その際にはその単語が持つ特徴や使い方も同時に教えることが大切である。

本文の学習は本文の内容を生徒が理解可能な簡単な英文で口頭提示する。そして音読、読解、内容にかかわるQ&Aなどで構成される。(三浦,2009) どの部分に重点を置くかは教師によって異なるため、様々なアプローチができるといえる。たとえば、音読に重点を当てるならば、教師の後に続いて発音させたり、シャドウイングさせたり、生徒同士で会話をさせたりする。また文章の内容に重点を置くのならば副教材を用いて、生徒の関心を広げたり、追求心を深めたりできるだろう。本文をするにあたっては確認をして定着させることも大切である。教師が口頭提示しと内容を十分に理解できたかを測る。この時に初めてノートに文章を写させる。音声で理解したことを文字で確認することによって、生徒の理解をより強化させるためである。(高橋,2003)

発展学習はその日に習った授業内容のアウトプットにつながる。“その日学習した内容を実際に自分の言葉として使わせる活動をしくむことで、学習事項の intake を図りたい。”(三浦,2009,p.133) 生徒の頭の中にあるものを目に見えるように外に出させる。教師は生徒にこの活動をさせることで、生徒が文法を使えるようになった、新しい単語をうまく使えているなどを見ることができるといえる。発展学習で生徒たちが作り上げたものに対して、その日の授業内あるいは次の授業のときにフィードバックを与えてあげることによって、生徒自身も自分の達成できたことを知ることができる。ただしフィードバックが生徒に対してたくさんバツを与えるものでなく、良い点悪い点を理由をつけて返してあげることによって生徒が納得して自分の評価を受け入れられると思う。

5. 自己研究、生徒研究

“一時間の授業を参観した際、その授業がうまくいったのかどうか漠然と判断するのではなく、具体的な評価項目に焦点を当ててその授業を振り返ってみることが大切である”(高梨,2005,p.204) 何を持って自分自身の授業がうまくいったかそうでないかは、指導案にそって自分の授業ができたかどうかであると考えられる。「ねらい」で書いた目標が生徒に達成させることができたか、指導案通りに生徒を誘導することができたのかなど生徒の達成だけでなく教師自身が達成することができたのか知ることができる。こう考えると指導案は授業の手順という役割だけでなく、教師のための自己評価基準になるだろう。もちろん生徒の達成した事柄についても評価できる。生徒の評価基準も記してあるため生徒が評価基準通りに授業に取り組んでいたか、授業評価に対応することを達成できたかで生徒の評価をつけることができるだろう。自分が達成できなかった点と生徒に点が明確になれば次の指導案を作るときの選考資料にもなりうる。

6. まとめ

学習指導案は授業を進めるにあたって大変重要な役割を果たすことだといえる。指導案を書かないと授業が成り立たなくなり、生徒の信頼も失う。こうなってしまうのは教師の果たす役割はなくなってしまうそうならないためにも生徒のことをしっかり考え、生徒がしっかり英語を学ぶことができるように指導案を書かなければならない。生徒のために思い自分の中で生徒が楽しそうに授業を受けている様子を思い浮かべながら指導案を書いていく。このように生徒のために思った指導案が書くことができ、うまく授業が進むことができれば、教師が理想とする“生徒の目が輝いている”、“生徒主体の授業”が達成できているといえる。この自分の理想が達成できた指導案は教師にとっての誇りと宝になるだろう。

引用文献

- 樋口忠彦 (Ed) (2007) 『すぐれた英語授業実践—よりよい授業作りのために—』 東京：大修館書店
三浦省五 (2009) 『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』 京都：ミネルヴァ書房
高橋一幸 (2003) 『授業づくりと改善の視点』 東京：教育出版
高梨庸雄 (Ed) (2005) 『英語の「授業力」を高めるために—授業分析からの提言—』 東京：三省堂

■英語科教育法Ⅰ 秋学期レポート課題

コミュニケーション・ランゲージ・ラーニング / ティーチングは役に立つ指導法か？

—その指導法の考え方と指導の実際から—

戸田 浩美

I. コミュニケーション能力とは

1. コミュニケーション能力の必要性

2008年3月28日に小学校と中学校の新学習指導案が告示された。外国語活動の目標として小学校新学習指導案では、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションをを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」（文部科学省, 2008a）と明記されている。また、中学校新学習指導案では、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されていることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションをはかれるような話題を取り上げること」（文部科学省, 2008b）と明記されている。ここから小学校、中学校とともにコミュニケーションを図る授業が行われ、生徒がコミュニケーション能力を授業の中で身に付けていくことが求められるということだと考えられる。

2. コミュニケーションとは何か

では、コミュニケーション能力とはいったい何なのだろうか。「コミュニケーション能力とは文法能力 (grammatical competence)、社会言語的能力 (sociolinguistic competence)、談話能力 (discourse competence)、方略的能力 (strategic competence) の4つの下位能力から構成される。」（大下, 2009, p. 17）それぞれどのような能力なのか考察していく。まず文法能力とは語彙、形態、意味などを文法的に正しく言語を操ることができるかという能力である。この能力は分レベルで意味を正確に伝え、理解するために必要な能力だと考えられる。（大下, 2009）過去の日本の英語教育では文法訳読式のアプローチでこの能力を伸ばすことに重きがかったように思われる。社会言語的能力とは、社会文化的な状況に配慮して適切に言語が使用できる能力である。（大下, 2009）この能力では「適切さ」が重要である。たとえばレストランでウェイターがお客の注文を取る際、「あなた、何食べたい。」とは言わず、丁寧に「ご注文は何に致しますか。」と尋ねる。このように社会的言語能力とは状況、場面に応じて適切な言葉遣いができる能力である。談話能力とは、意味のつながりや論理の一貫性を考慮しながら、まとまりのある発話や文章を構成することができる、理解することができる能力である。（大下, 2009）たとえばAさんが「電話だよ。」という。しかし、Bさんは入浴中で「今お風呂なの」という。そこでAさんは「わかった」と答える。この会話は一見するとばらばらのように思われるが、Bさんの「今お風呂なの」には「今は入浴中で電話に出ることができないからAさんが電話に出て」という意味が込められており、それに対してBさんが「わかった」と答えている。このように個々の文をバラバラに解釈するのではなく、前後関係や場面を把握し、文と文との間の文法的つながりや意味的つながりを考えながら、言葉を理解し、操ることができる必要がある。（大下, 2009）方略的能力とはコミュニケーションの過程で起こる様々な障害に対処し、コミュニケーションをうまく進めていくことができる能力である。（大下, 2009）たとえば難しい言葉をやさしい言葉に言い換える、ジェスチャーなどを使いなんとか自分の言いたいことを相手に伝えようとする能力である。しかし、背景知識なしではこの4つの能力を使いこなすことはできないとおもわれる。相手の言っていることにある程度の理解や知識がないと、言っている内容を十分に理解できない。また、自分が全く知らないことを長時間話すことはできない。これらを踏まえて、コミュニケーション能力とは「背景知識を基に、言語を正確に、適切に、しかも流暢に操ることができる能力である」（大下, 2009, p.23）と定義する。

II. なぜ CLT を使うか

コミュニケーション能力がどのようなものかの理解を試みた。ではこのコミュニケーション能力を養成するためにどうしてコミュニケーション能力がどのようなかの理解を試みた。ではこのコミュニケーション能力を養成するためにどうしてコミュニケーション能力を養成するに焦点をあてた指導法である。」(田崎, 1995,p246)と述べられている。この教授法で学習者は文法と語彙を組み合わせることで正しい分を作り出す能力だけでなく、具体的なコンテキスト(前後の文脈・状況・場面・人間関係・社会的文化的背景)の中で、適切で有意義なコミュニケーションを行うことのできる能力を身に着けることであり、運用能力は目標言語を使って実際にコミュニケーションを行う過程を通じて目標言語を習得すると考えられている。(鎌田,1996)この様に CLT の指導方法は先に述べた小学校、中学校の学習指導案で目標とされているコミュニケーションを図る授業、コミュニケーションを身に着ける授業と一致しているといえる。したがって CLT が英語教育の指導法として役に立つと考えられるようになった。では、本当に役に立つものなのか考えていきたい。

III. CLT の特徴

この教授法の特徴としてはコミュニケーション能力養成の面が特に強調されていることである。(田崎,1995)しかしながら、この学習理論はあまり多く提案されていない。そこで学習理論に通じる指導原理という形で Morrow (1981) は CLT の原理を次の5つのように提案している。1つ目は今行っていることの意味を知ること。CLT は授業の中で学習者が実際に行ってみようことを行う。読むことを目的とするならば、英字新聞を読んでみる。書くことを目的とするならば、英語で手紙を書いているなどである。このように実際にコミュニケーション直結する作業を中心に授業を組み立てていく。そして英語の授業は英語で行うことが基本となる。ポイントとしては「なぜこれを学習しているのか、それによって何が出来るようになるのか」を教師、生徒ともに理解することである。2つ目に全体は部分の集合以上のものであるということがあげられる。コミュニケーションとは誰かに決められた言葉を決められた通りに言葉で発せるということではない。状況や場面によって話す言葉や自分の立つ立場は変化する。このように場面や状況によって適切なコミュニケーションができる能力を身に付けられるような指導を行うことがポイントとなる。3つ目はプロセスが形成と同様に重要であるということ。コミュニケーションにおいて結果が決まっているものは少ない。何らかのコミュニケーションを経て結果が生まれてくる。よって CLT では教える過程や学習過程自体がコミュニケーションであることが重要となる。Morrow(1981) はインフォメーション・ギャップ、選択、フィードバックの3つをコミュニケーションの要件として挙げている。コミュニケーションとは一方が知っている情報を他方が知らないという状況で行われる。また発話者は自分の発言に選択権を持っている。そして学習者がコミュニケーションを行ったとしても、学習者がその中身を理解していないとコミュニケーションを行ったとはいえない。したがってコミュニケーションの意図が達成されたかどうかのフィードバックが必須となる。4つ目は学ぶために実際に行ってみようことである。コミュニケーションは生徒が自ら行わない限り身につかない。たとえ、教師が画期的なコミュニケーション活動を用意したとしても生徒が参加しなければ何の役にも立たない。したがって、CLT の指導では、学習者が主体となって体験を通して学習活動が展開するように工夫する必要がある。5つ目に誤りは必ずしも誤りではないということ。これには生徒の誤りはきちんと正す必要があるという反対意見もある。しかしながら CLT ではコミュニケーション能力を伸ばすことを目的としているので、生徒のコミュニケーションを行おうとする意欲をなくす方が問題である。つまり CLT は言語形式の正確さよりも流暢さが優先される。

IV. 利点と効果

この学習の良いところは生徒が積極的にコミュニケーションを図ろうとすることであるだろう。またそのコミュニケーションは学習者が実際に行うような場面や状況を想定したものであるため、学習者にとって実用的であるといえる。また指導技法としてはインフォメーション・ギャップのある活動が行われるため、ゲームや4コマ漫画の作成、買い物や案内のロールプレイなど楽しんで学ぶことができる。

CLT の特徴でも述べた通り、教師は生徒の誤りに対して几帳面に正そうとしないので、生徒は生き生きと活動に取り組むことができる。楽しく授業に取り組むことができる。その結果コミュニケーション活動に積極的に参加し、英語を話す機会がどんどん増えていくことで、実践的に使用する speaking の能力や listening の能力を伸ばすことができる。

V. 批判

教授法において良い点があるということは、悪い点もあるということを押さえておかなければならない。CLT においては原理そのものではなく、CLT と結びつく個々の側面に対して批判が向けられる傾向にある。(田崎,1995)まず、シラバスに対する批判である。日本教育のような言語教材にしばりの強い公教育では部分的にしか取り入れられないという点である。次に教材に対する

批判である。CLT では自然の言語教材に反映させる観点から生きた教材の使用が強調されてきた。例えば英字新聞を読ませるとか、英語でニュースを聞き取るなどである。しかしこれにはついてくることのできる生徒と、ついてこれない生徒が出てきてしまい生徒の幅が限られたものになってしまう。理解可能な入力をどのようにして与えると、生徒が自然に習得することのできるか考える必要がある。そして評価に対する批判である。文法の評価と異なり、プロセスを重視する CLT では客観的に評価が得にくいという批判がある。(田崎, 1995) 授業でできた生産物よりも、その過程をどう評価していくのが問題となる。授業内の活動の中で発言や、かかわりには生徒の性格や能力の差などで評価しにくい部分があるように思われる。これはどのように評価していくのが今後の課題であるだろう。また生徒の誤りを無頓着にして評価していいのかということも考えていかなければならない。生徒がむちゃくちゃな誤りをしていたにもかかわらず生徒の誤りを正すことなく評価してしまうと、生徒はずっとその間違いに気づかないだろう。いざ生徒がコミュニケーションを行っているときに障害が出てきたとすると、生徒は英語に苦手意識を持つのではないかと考えられる。やはり生徒のやる気をそがないように気を付けながらも正すべきものは正すべきだと思われる。その誤りの正し方に関しては今後考えていかなければならない課題であるだろう。最後に技能偏重に対する批判である。CLT は 4 技能 (speaking, listening, reading, writing) のどの面においても指導可能であるが、コミュニケーションが speaking と listening を連想させることから、writing と reading が授業内で軽視されやすい。(田崎, 1995) また学習の初心者から英語の授業は英語でとなると学習についていくことができない生徒が出てくるのではないかという問題も出てくる。コミュニケーションに重点が置かれると話すことに必死になり、きちんとした文構造でなくてもただ相手に伝わればよいという授業でいいのか。このような授業だと文章を読解する能力、記述する能力に支障が出てくるのではないかと心配される。

また CLT の教材はゲーム、ロールプレイ、シミュレーションなどのタスクや手順などを意図的に取り組んだ教材である。(田崎, 1995) 既存のものがあればすぐに行えるかもしれないが、一からこれらを準備するとすれば教師は相当な準備が必要になるだろう。物を作るのにお金も時間もかかる。教材を使用するには的確な説明や適切な評価方法も考えなければならぬ。教師にかかる負担はかなり大きなものになると予想される。

VI. 今後の展開

ここでは実践例として「既習事項を駆使するコミュニケーション活動・自己表現活動」を行った田尻五郎の授業で考えてみる。(樋口, 2007) この授業ではまず英語でのあいさつから始まり、毎時間行われている生徒によるスピーチが行われた。スピーチが終わると、乾燥発表で使える語句のゲーム、テーマに関する small talk、と続く。この授業では生徒にたくさん話すことに重点が置かれている。この授業に対する彼の評価は主に生徒の成長ぶりに関するものであった。この授業は中学校 3 年生の 3 学期に行われたものなので三年間の総復習のように扱われている。そのせいもあってか、生徒は自分の意見を英語で交換し合い、会話が弾んでいたと書かれていた。最初からすらすらと言えるわけではなく、練習することで上達する。また教師が生徒の会話に交じり、教師の英語での質問に生徒が英語で答えることができると生徒の自信にもなるとあった。

ここから、コミュニケーションをするために生徒がコツコツ英語を練習し、コミュニケーションを行う活動を与えれば、英語の力は伸びるのではないかと考えられる。また、生徒だけでなく、教師も積極的に生徒の会話の中に交じることも必要なことだといえる。

VII. まとめ - コミュニカティブ・ティーチングは役に立つ指導法か -

冒頭にも述べたが、文科省は英語教育において「コミュニケーション能力」を精力的に学習者に身に付けさせようとしている。そしてコミュニケーション能力は必要なものだと述べてきた。しかしながら、コミュニケーション能力は英語教育だけに必要なものではないし、英語教育だけで身に付けられるものでもない。現在の英語教育では「コミュニケーション」という言葉に踊らされているような気がする。成田 (2013) は現在の英語教育に批判的な意見を述べている。小学校、中学校、高校での現在の英語の授業では「コミュニケーションもどき」が横行されているという。小学校では楽しむことだけにしか重点が置かれず、あいさつや、簡単な質問に対する返答の仕方しか教えていない。中学や高校の「コミュニケーション」の授業においても、自由な発話による意見交換はされていないという。英語力が不足で言いたいことが表現できないのならば、まやかしの活動で時間を浪費してしまうことになるだろう。この意見に同意したい。実際に大学の授業でほとんど無知と言っていいテーマを英語で説明しなさいと言われてた時、背景知識もない、そのテーマに関する単語もほとんど知らないのに何を話せばいいのかかわからない状況に陥ったことがある。文科省が求めるコミュニケーション重視の授業では、私のような状況に陥る生徒が出てくるのではないかと思われる。やはり一定の英語能力が身につけている生徒でないとこのコミュニカティブ・アプローチは活かせないと思う。そして生徒がコツコツ英語を学ぶという努力も必要である。英語力がある程度備わっており、授業で行われる活動、テーマに関しての知識がある生徒に対してこの教授方法は効果的なものになるだろう。この英語力をどのように育てていくかが今後考えていかなければならない課題である。

参考文献

- 樋口忠彦 (2007) 『すぐれた英語授業実践』 東京：大修館
- 鎌田修 (1996) 『日本語教授法ワークショップ』 東京：凡人.
- 文部科学省 (2008a) 小学校学習指導要領・外国語活動 . Retrieved January 29, 2015 from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm
- 文部科学省 (2008b) 中学校学習指導要領・外国語 . Retrieved January 29, 2015 from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm
- Morrow, K. (1981) 'Principles of communicative methodology' In Johnson, k. and K. Morrow. *Communication in the Classroom*, London : Longman.
- 成田一 (2013) 『日本人に相応しい英語教育』 東京：松柏社
- 大下邦幸 (2009) 『コミュニカティブクラスのすすめ；コミュニケーション能力養成の新たな展望』 東京：東京書籍
- 田崎清忠 .(1995) 『現代英語教授法総覧』 東京：大修館